

## 主婦でも働く女性でも

「この大学には、自分の母校以上に思入れがあるんです」

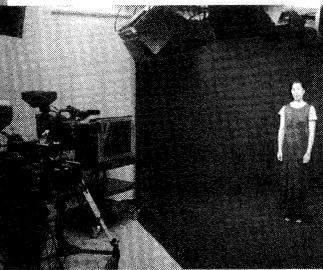
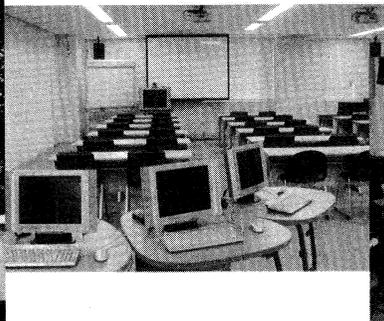
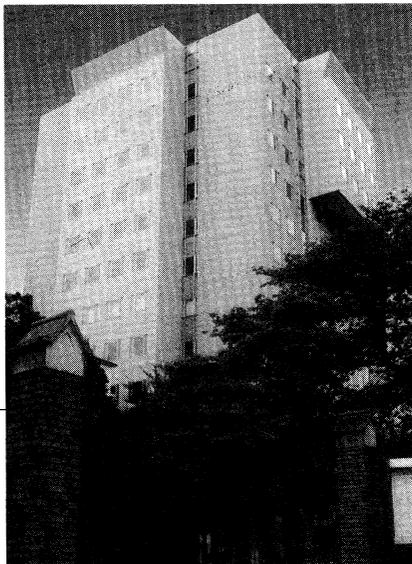
こう語るのは、日本女子大学生涯学習総合センター（LCC）所長の石川孝重教授である。日本女子大が昨年創立百周年を迎え、それを記念して建設された「百年館」内に設けられたLCCの設立に当たって、そのハード・ソフトづくりに奔走した。

LCCで行われているのは、情報の受発信と各種の講座で、一般の講義と同じように、講師と対面して受ける実形式の講座のほか、TV会議システムやインターネットを利用して遠隔地でリアルタイムに受講できるライブ講座、さらに編集された講座・情報映像を受講者の求めに応じてインターネットを通じて配信する形式のVOD講座と、三通りの受講方法がある。

注目すべきはVOD講座。パソコン上の受信画面は三分割され、それぞれ講義風景の動画像、図表など資料やテキストのカラー画像、講師の板書の画像が映し出される。これを受信するのに大容量の回線は必要なく、一般の電話回線で使われている五十六KBのレベルでインターネットで受信できるのだ。「女子大の事業として行う講座ですから、家庭にいる主婦の人たちにも簡単にアクセス、受講できる仕組みを考えたい結果、こうしたシステムになりました」（石川教授）

学びたくても時間的な余裕がないという人にはありがたいシステムだ。これなら外で働く女性でも、家庭の主婦でも、いつでもどこでも受講の場が提供される。日本女子大は、創立者の成瀬仁蔵が女子教育の必要性を叫んで設立されたという経緯があり、このLCCは、その理想を実現するシンボルとも言える。

「女性」という視点が、LCCには随所にかがられる。幼児のいる母親が通えるようにと、有料だが託児スペースも設けられ、講座を受講している間、預けておくこともできる。



LCCがある日本女子大学百年館（左）とLCCのマルチメディア室（中）、バーチャルスタジオ。

LCCは会員制で運営され、会員数は当初見込みの二千人を大きく上回る五千四百人。うち五千人近くが日本女子大の卒業生で占められ、中には現役の学生もいる。さらに男性会員も五十〜六十人、海外で受講している人もいるほどの人気ぶりだ。

もともと、石川教授はこうも言う。

「講座はあくまでもフェイス・トゥ・フェイスで行われるのが理想。ただ、時間的・空間的制約からそれが不可能な人たちのために、インターネットを使っていくわけで、コンピュータは、いわばそのためのツール、デバイスに過ぎないんです」

一見、工学博士（建築学）らしくない言葉だが、そこには、このLCCを「人間を中心に据えた」施設として広く利用してもらいたいという願いがある。その発想から、講義

画像を収録する際に使うバーチャルスタジオの設計なども手がけ、LCC内にある交流スペースなどを設けるに当たっては、積極的に提案を行っている。母校以上の思い入れという冒頭の言葉の意味がよく分かる。

## 女子大の存在感際立たせる

これまでに行われた講座はパソコンやインターネットの入門、中国語講座あるいは「知の最前線シリーズ」宇宙へ旅立つ桜」といったユニークなテーマの一連の講座、さらには女性経営者の多い日本女子大の特性を踏まえての「女性起業家と語る」といったものなど、バラエティに富んでいる。

日本女子大は、幼稚園から大学院の博士課程まで、つまり物心がついてから二十代半ばまでの世代をカバーしている。

LCCは、さらに日本女子大を巣立ったあとの世代も視野に入れて、生涯学習を実践する場と言えよう。

女性の社会参画が当たり前のようになっているが、欧米先進国に比べ、まだまだ垣根は高い。その垣根を取り払う意味においても、女子大の存在意義は十二分にあると言っている。LCCは、女子大の存在意義をより高め、ひいては女性の社会参画を一層促す機能も期待されている。

LCCの講座に興味がある人は、ホームページ <http://LCC.jwu.ac.jp/> にアクセスを。

